

公益財団法人飯塚教育英会は、1995（平成7）年の設立以来、栃木県内の高等学校、特別支援学校高等部出身者の修学支援、留学生の支援を通じ、将来社会に貢献できる有為な人材を育成してきました。その活動の一環として「育英講演会」を毎年開催しています。第19回の今年は8月23日、宇都宮東武ホテルグランデで開かれ、哲学者・作家で立命館大学大学院教授の千葉雅也さん（宇都宮市出身）が『学ぶことと文化について』と題し、講演を行いました。（企画・制作 下野新聞社ビジネス局）

千葉 雅也 氏

インターネットの普及によって世界の見え方は大きく変わりました。誰もが発信できるようになり、スマートフォンの普及とともに、差別的表現や炎上などさまざまな問題も噴出してきています。2023年にAIが登場して以降、状況はさらに変化しています。AIが文章を簡単に作成できるようになり、時間をかけてじっくりと考えることや、人と丁寧につき合うことがますます難しくなっていると感じます。効率化が進むほど、私たちの行動は瞬間的・投機的になり、物事を長期的に考える力が失われていくように思います。

「AI時代」を生きるために

講師

哲学者・作家、立命館大学大学院教授



1978年、宇都宮市生まれ。哲学者・作家。立命館大学大学院先端総合学術研究科教授。東京大学教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論コース博士課程修了。博士（学術）。著書に『動きすぎたはいけな一シル・ドゥルーズと生成変化の哲学』（第4回紀伊國屋じんぶん大賞、第5回表象文化論学会賞）、『勉強の哲学』、『現代思想入門』（新書大賞2023）、『センスの哲学』など。小説作品に『デッドライン』（第41回野間文芸新人賞）、『マジンカミラー』（第45回川端康成文学賞）、『エレクトリック』などがある。

AIによって仮想的に再現できるものが増え、実在の経験は代替できなくなる。人間らしさは効率性や有用性を越えた次元にあり、テクノロジーの発展によって逆説的に、実在の希少性や本物の経験の価値が高まるのです。

AI時代になっても、教育の基本は変わらないと私は考えています。「読み書き」と「そろばん（数学的思考）」といった基礎教育はこれまで以上に重要です。言葉の意味を理解し、意思疎通する能力がなければ、AIが出した結果を正しく理解することができなくなります。AIでできるような作業はAIに任せ、人間自身が目力で文章を書く、計算する能力も引き続き必要です。若い世代がAIに依存しすぎて、AIの出力が正しいかを検証する能力を失う危険性があります。

また、AIの出力を再びAIに学習させることで、情報の質が劣化し、ノイズが増えていく可能性も指摘されています。これを防ぐためには、紙の本を読んだり、自分の手で計算したりすること、基本的な学習を続けることが不可欠です。AIを使って業務を効率化することは当然進めるべきですが、それ以上に記憶力、計算力、理解力などの人間の基礎力を維持することが重要です。

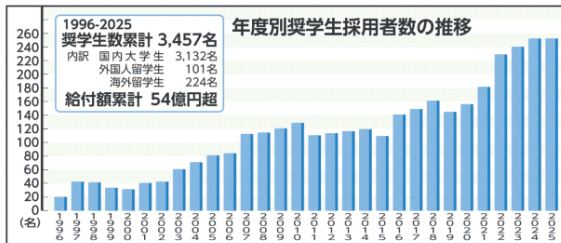
ことが重要で、インターネットは、あらゆる情報を巨大なデータとして保存し、すべてを同等に扱うようになり、歴史的文脈を無視して古い情報が再発見されるなど、ランダムなアクセスと再利用が可能になったことが、インターネットがもたらした第一の革命でした。AIは、インターネットに蓄積されたデータを再編集するためのアルゴリズムであり、その本質は「アーカイブ」だと言えます。しかし、現在でもインターネット上にアーカイブされていない情報の方が圧倒的に多く、図書館にある貴重な紙資料が失われつつある状況もあります。

AIを使った業務効率化を進めることは大切ですが、それ以上に重要なのはインターネットの外にある膨大なアーカイブや歴史を自分の力で読み解き、自分の頭で考えることです。それが、AI時代に人間として生きていくために、私たちが学び続けるべきことなのだと思います。

Iizuka Takeshi Scholarship Foundation

令和7年度(2025年度)評議員・理事・監事・奨学生選考委員

理事		監事		評議員		奨学生選考委員	
飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規
飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規
飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規
飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規
飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規
飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規
飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規
飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規
飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規	飯塚真規



令和8年度採用予定(10月下旬決定)

大学奨学生	230名
外国人留学生	5名
海外留学支援奨学生	15名

奨学生OB・OG進路

総務省、和歌山県市町村、外務省(外交官)、警察庁、会計検査院、デジタル庁、最高裁判所、税理士、公認会計士、弁護士、医師、獣医師、薬剤師、看護師、保健師、地方公務員(栃木県庁他)、小中高教員、東大講師、お茶の水女子大助教、T K C、朝日新聞社、下野新聞社、世界銀行、日本銀行、都市銀行、地方銀行、外資系コンサル企業、フォレスト経営、ピアニスト、劇団俳優 など

主催・公益財団法人 飯塚教育英会
後援・栃木県 栃木県教育委員会 栃木県高等学校長会 下野新聞社

Iizuka Takeshi Scholarship Foundation

ITSF 公益財団法人飯塚教育英会 主催
令和7年度 育英講演会

人間の基礎力維持が重要

主催者あいさつ

理事長 飯塚 真規



30年、奨学生支援 今後も

私も飯塚教育英会は、1995(平成7)年に活動を開始して、もう30年を迎えようとしています。これまで延べ3457名の奨学生を支援してきました。2025(令和7)年度は、大学生232名、海外留学生18名、合わせて250名に奨学金を給付させていただきます。この30年間で支援した金額の累計は54億円に達し

私にもっとも大変喜ばしいことだと感じています。この奨学金の原資は、飯塚教育英会の創始者であり、株式会社T K Cの創業者でもある飯塚義博氏が保有していたT K Cの株式を基本財産

に創業し、日本の会計事務所や市町村向けにコンピュータソフトを開発、提供する会社です。今、労働人口の減少が社会問題となる中で、お子さまの将来の就職先について大まな関心をお持ちのご家庭も

多いかと思いますが、T K Cも皆さまの就職先の選択肢の一つとして検討いただければ幸いです。3年からのインターシップ・就業体験なども開催していますので、ぜひ会社の業務に関心を持っていただければと思います。

育英講演会は、2007(平成19)年から開催しており、今回で19回目を迎えます。本日は230名の方にお申し込みいただき、74名の奨学生とご家族にご参加いただいていることを大変うれしく思います。本日、講師としてお招きし

お楽しみください。大学を卒業され、現在は立命館大学の大学院先端総合学術研究科で教授を務められている藤野拓斗さん(学術)。著書に『動きすぎたはいけな一シル・ドゥルーズと生成変化の哲学』(第4回紀伊國屋じんぶん大賞、第5回表象文化論学会賞)、『勉強の哲学』、『現代思想入門』(新書大賞2023)、『センスの哲学』など。小説作品に『デッドライン』(第41回野間文芸新人賞)、『マジンカミラー』(第45回川端康成文学賞)、『エレクトリック』などがある。

また、AIの出力を再びAIに学習させることで、情報の質が劣化し、ノイズが増えていく可能性も指摘されています。これを防ぐためには、紙の本を読んだり、自分の手で計算したりすること、基本的な学習を続けることが不可欠です。AIを使って業務を効率化することは当然進めるべきですが、それ以上に記憶力、計算力、理解力などの人間の基礎力を維持することが重要です。

以上が講演会の概要です。本日は「AI時代に必要なのは非AI的なもの」について講演いただいた藤野拓斗さんです。T K CでもAIの活用を積極的に取り組んでいます。先生がお話くださる「非AI的なもの」は、今後ますます重要になると考えています。私も本日の講演を心から楽しみにしております。皆さまも、先生の素晴らしい講演と、その後の奨学生とのパネルディスカッションを、ぜひお楽しみください。



司会の早稲田大学3年小倉心優さん



奨学生と千葉教授のパネルディスカッション

育英講演会に参加して



聖心女子大学現代教養学部3年 田岡 照珠さん



埼玉大学教養学部4年 市川 千尋さん



中央大学法科大学院 既修2年 藤野 拓斗さん



早稲田大学文学部3年 吉田 真紘さん

「AIによって人間の存在が脅かされているような不安を感じる」と質問しましたが、千葉さんのお話を聞き、脅かされるのは仕方のないことなので、不安ばかりを感じるのではなく、どう折り合いをつけていくかが大切なのだと思います。

AIとの共存において、人間が物作りを続けることの重要性を感じています。有用性や価値だけでなく、人間にしかできない「無駄」も大切にしていきたいと思いました。SNSは言論を自由化する一方、発言しづらくなるという矛盾もあると思います。

AIとの付き合い方が気になっていました。AIの進展は止められないので、反対するのではなく、どう使っていくかという考え方を、道しるべを示してくれました。千葉さんの小説のファンでもあるので、実際に生の声が聞けて光栄でした。

AIの使用と関連した学習スタイルや学問のあり方が提示され、興味深かったです。僕は演劇の脚本を書くのですが、自分の生成性を追求して作品にしたいという向き合い方や、外からのインプットをどう作品にするかという点も考えさせられました。